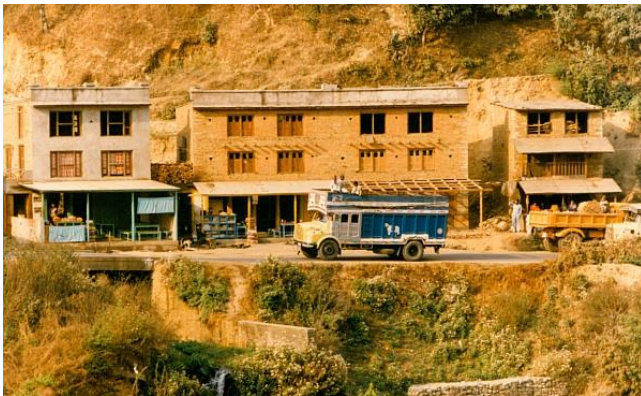


9月 2022

## セピア色のネパール(8):ポカラ～ダンプス～ガンドルン

ネパールに初めて行ったのは1985年3月、アンナプルナ・トレッキングが目的だった。記憶は写真以上にセピア化しているが、それでも強烈な印象は変色しつつも残っている。

カトマンズからポカラへは、バスで行った。片道39ルピー(約400円)、約7時間。大型バスに乗客殺到、車内に入れない人は屋根によじ登った。私も、もたもたしていて車内に入れなかったので屋根に登ったが、外国人と見て地元民乗客が車内に移してくれた。親切に痛く感謝！ 山羊やニワトリも乗車していたが料金不明。



■ガードレールなし。崖下には転落車も。

バスは、デコボコ、クネクネ道をハラハラ、ヒヤヒヤさせながら走り、ところどころ、茶店があるところ(いまでいうドライブイン)に停まり、小休止をとった。トイレ休憩でもあるのだが、困ったことに茶店付近には、まずトイレは見当たらない。仕方なく近くの物陰や畑に行き用を足した。女性も同じ。強烈な「無トイレ文化」の洗礼だった！



■少し大きなバス停で小休止(町名失念)

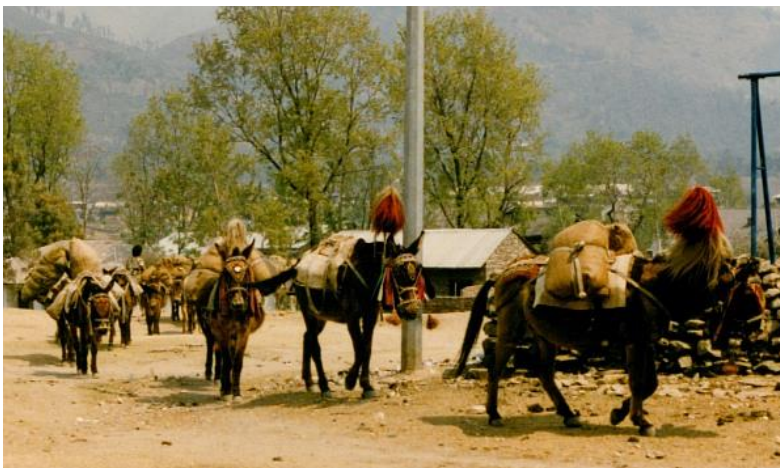
夕方、ポカラにつき、ロッジに宿泊。ツイン30ルピー(300円位)。その頃のポカラは、カトマンズよりもはるかにのどかな、田園の中の小さな町であった。いまは50万人近い大都市だが、当時は6万人ほど。車も少なく、自然にあふれていた。ブーゲンビリアなど花々が咲き乱れ、ペワ湖は水清く、山からは飾りをつけた馬やラバの隊商が町に降りてきた。まるで、おとぎの国！



■ペワ湖岸で放牧



■ペワ湖で食器洗い



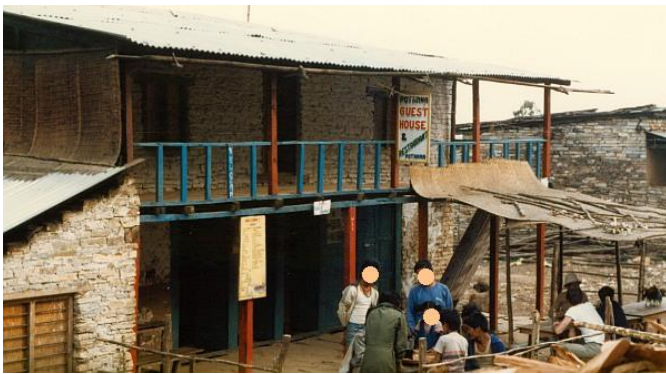
■ポカラに入ってくる隊商

ポカラからダンプス～ランドルン～ガンドルンと、トレッキングを楽しんだ。マチャプチャレやアンナプルナに感動したことはいうまでもないが、それ以上に印象的だったのは、村の風景や生活。まるで昔の日本の村を追体験しているようだった。

村のロッジ(宿屋)はごく質素であったが、それだけになおのこと懐旧の念に駆られた。ツイン、1泊4～6ルピー(40～60円位)。申し訳ないので、収穫したてのエンドウを買い求め、茹でて食べた。うまかった！



■ダンプス付近



■ダンプスのロッジ



■ガンドルンのロッジ

ジ前から望むアンナプルナ

体験は、時のふるいにかけてられ、忘れがたいものだけが変形し変色しつつ残っていく。それに加え、外国人の体験は、もともと余所者の身勝手な、自分本位のものであることを免れない。そうしたことは

重々承知しながらも、「後期」高齢者ともなると、古き良き昔の懐旧には、往々にして抗いがたいのである。

【参照 2022/09/28】[郷里とネパール:失って得るものは？](#)

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2022/09/19 at 16:45

カテゴリ: [ネパール](#), [社会](#), [経済](#), [自然](#), [文化](#), [旅行](#)

Tagged with [アンナプルナ](#), [ガンドルン](#), [ダンプス](#), [ペワ湖](#), [ポカラ](#), [マチャプチャレ](#)

## セピア色のネパール(7):懐かしき暖色の古都

初めてネパールに行った1980年代後半の頃のカトマンズは、「暖色の古都」であった。

日本では蛍光灯や水銀灯が普及し、街も村も青白い光に照らされ、明るくはあるが無機質の冷たい感じは否めなかった。

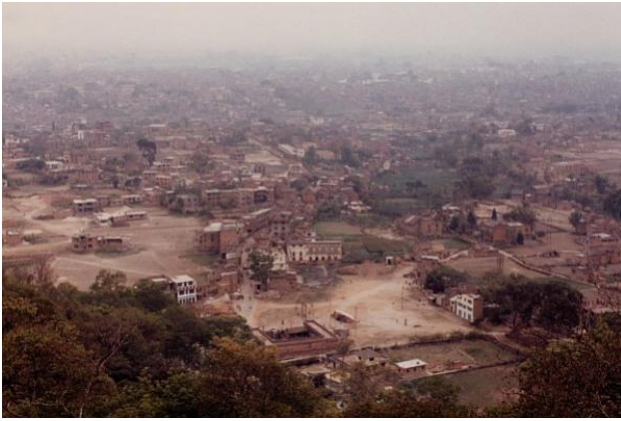
ところが、ネパールでは、1990年代後半頃までは、照明はほとんどが暖色系のナトリウム灯か白熱灯、あるいは灯火であった。飛行機が日没後、カトマンズ盆地上空に近づくと、暖色に柔らかく包まれた街や村が下方に小さく見え始め、旋回、下降につれ大きくなり、ほどなくして、その暖色の街の中へと機は着陸する。

はじめてこの暖色の夜景を目にしたとき、カトマンズは、まるで不思議のおとぎの国の古都のように思われた。2回、3回と訪れると、その思いに、そこはかたない懐かしさの念が積み重なっていった。わが村や町も、戦後しばらくは、これに近い夜景だったからだ。

しかも、カトマンズ盆地の暖色系の暖かさは、夜景だけではなかった。盆地の街や村では、建物にも道路や広場にもレンガが多用されており、昼間も、暖色系の優しい雰囲気を出していた。まだ車が少なかったので、レンガ敷きの道路も広場も美しく維持されていた。

レンガといえば、もう一つ忘れがたいのが、郊外のレンガ工場。一面レンガ色にくすむ広い敷地と大きなレンガ窯、そして、そこにそそり立つ異様に高い煙突。日本では目にしたことのない不思議な光景であり、訪ねのたびにキルティプルやバクタプル付近のレンガ工場を見に出かけていた。

こうしたカトマンズ盆地の暖色の優しい光景は、1990年代後半以降、急速に失われて行き、いまでは多くの地域で、日本と大差ない合理的で冷たい感じの街や村へと変貌してしまっている。



■スワヤンプより市内遠望。まだ農地や空き地が多い(1985年3月)



■旧王宮付近。建物はほとんどレンガ造り(1985年3月)



■カトマンズ市内のレンガ畳(1985年3月)



■バクタプル付近のレンガ工場(1985年3月)

【参照】[煉瓦と桜のキルティプール](#) [田園に降り立つ神](#)

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2022/09/17 at 19:07

カテゴリー: [ネパール](#), [社会](#), [文化](#), [歴史](#)

Tagged with [レンガ](#), [煉瓦](#), [古都](#)

## セピア色のネパール(6): 写真自動補正の怪

ここまで1993年と94年の写真を数百枚デジタル化し、そのうちの十数枚をこのブログに掲載してきた。

ここで、あることに気づき、愕然とした。――セピア色に多かれ少なかれ退色したプリント写真が、何回も自動修正され、色彩豊かなカラー写真に蘇生しているのだ。いったい、どうしたことか？

写真の自動修正は、何段階かで行われているようだ。まず簡易スキャナーで取り込んだとき最初の修正が行われ、次にデータを写真ソフトで再読み込みし保存したとき2回目の修正が行われ、そしてプロ

投稿写真をスマホやパソコンで表示したとき3回目の修正が行われているらしい。もっと多段階かもしれないが、素人の私には、この3段階しか見当がつかない。

これら写真自動修正機能のうち、今回、特に驚いたのが、スマホによる画像補正能力の高さ。私のスマホは格安アンドロイドだが、それでも投稿写真を表示させると、すべて見違えるほどカラフルになっている。高級スマホなら、もっと「美しく」表示されるに違いない。

これは、「美しい写真」を見たいという一般的な願望は叶えることになろうが、「私の中でセピア色化しつつあるネパール」の提示という、私自身の本来の意図には反することになる。

このような他者には気づかれぬような、そして自分でも注意していなければ気づかぬような修正や変更が、現代社会では、写真だけではなく他の情報についても、いたるところで行われている。情報はどこかで操作され、見たいと思込まされているものを見せられている――恐ろしい。

(補足)今のスマホには、多かれ少なかれ、被写体全体の中から見たいものや見るべきものを選択し、補正・修正し、強調して写し表示する機能があるらしい。「見たいもの」「見るべきもの」は誰が決めるのか？ 写真機の、そこにあるがままの「真」を写し撮りたいという積年の悲願は、放棄されてしまったらしい。



■カトマンズ(1993年3月)カラー写真



■白黒変換した上記写真。セピア色のネパ

ールにはこちらの方が適切かも。

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa [編集](#)

2022/09/04 at 17:17

カテゴリー: [ネパール](#), [情報](#), [文化](#), [歴史](#)

Tagged with [カメラ](#), [スマホ](#), [写真](#), [情報化](#), [情報操作](#)

## セピア色のネパール(5): 神仏と祭りのカトマンズ盆地

ネパールに行って何よりも驚いたのは、神仏と祭りの多さ。いたるところに神や仏がいるし、毎日のように、どこかで大小さまざまな祭りが行われていた。人びとの生活は神仏とともにあった。

日本のわが村でも、1950年代末頃まで、高度成長・生活近現代化の波が及び始めるまでは、ネパールのそのような生活に近い暮らしであった。



神仏は、村の寺や神社にだけでなく、山や森や川や田や畑など、いたるところにいた。村人は、古来の習わしに従い、それぞれの神仏へのお参りを欠かさなかった。神仏は無数にいて、村人と共に暮らしていた。

いまでは信じられないことだが、小さなわが村でも秋の収穫後には、それぞれの家が親戚や友人を招き、盛大に祭りを祝った。獅子舞など様々な歌舞も催され、出店さえ軒を連ね、繁盛していた。近隣の村々でも、競って、同じように祭りを催していた。

今は昔、野の神仏は大半、忘れられ、雑木・雑草に埋もれるか、行方不明になってしまっている。村の生活は近現代化・合理化され、経済化され、もはや人びとには神仏にかかわる余裕はなくなってしまった。

近現代化、合理化、経済化が普遍的な現象だとすると、ネパールもわが村と同じような経過をたどるのではないか？

ネパールには大地震(2015年5月)翌年に行ったきりだが、そのときの印象では、震災もあつてか、カトマンズ盆地の街や村は劇的に近現代化し始めていた。道端の神仏は無くなるか排ガスまみれ。小さな社寺の中には、見捨てられたかのように見えるものが少なくなかった。

ネパールでも、日本ほどではないだろうが、国家社会全体の資本主義化が進み、それとともに人びとの生活の世俗化・脱伝統宗教化も進行していくのではないだろうか。



■ガイジャトラ／バクタプル 1994年8月



■ガイジャトラ／バクタプル 1994年8月



■ダクシンカリ 1993年3月



■ダクシンカリ近辺の村 1994年8月

谷川昌幸(c)

Written by Tanigawa [編集](#)

2022/09/03 at 14:17

カテゴリー: [ネパール](#), [社会](#), [経済](#), [宗教](#), [文化](#)

Tagged with [ダクシンカリ](#), [祭り](#), [寺院](#)

## セピア色のネパール(4):水の都カトマンズ

1990年代初期は、カトマンズやパタン、バクタプルはまだ、それぞれ水の豊かな盆地の小さな古都であったと記憶している。

共同水場の多くでは、水場がそこにつくられたのだから当然とはいえ、吐水口から水が出ていて、水汲み、水浴、洗濯などが日常的に行われていた。

バグマティ川やビシュヌマティ川も、汚れ始めていたとはいえ、水浴や魚取をするなど、まだ人びとの生活で日常的に利用されていた。

そのカトマンズで水場の水が枯渇し、河川がドブ川のように汚染されてしまったのは、いつの頃からだろうか？

それは、おそらく1990年代半頃からのカトマンズ盆地の急激な人口増、都市化の結果であろう。それまでは田園に囲まれた小さな、雰囲気的には半農村的な古都であったカトマンズ、パタン、バクタプルが、民主化運動(1990年)成功後の自由資本主義化とマオイスト人民戦争(1996~2006年)による地方からの大量人口流入とにより、一つの巨大な近現代的大消費都市圏となってしまった。

水が大量に汲み上げられ、使用され、枯渇してしまい、また河川が無処理廃棄物でドブ川となってしまったのは当然と言わざるをえない。



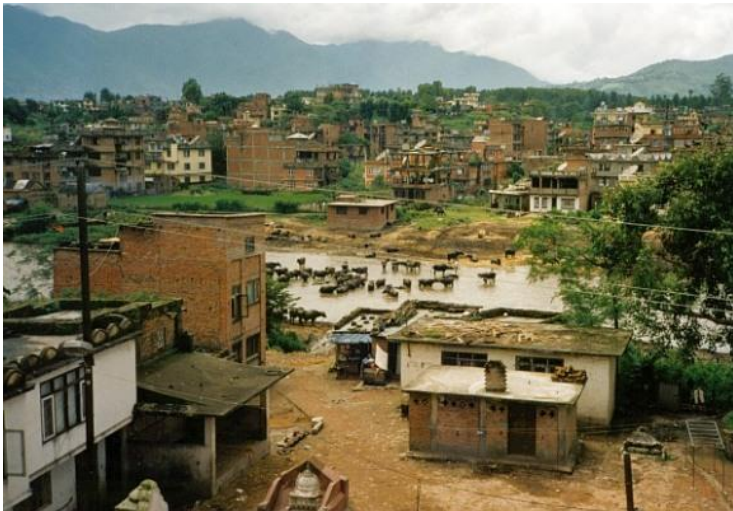
■カトマンズ 1993年8月



■カトマンズ 1993年8月



■バクタプル 1993年3月



■ビシュヌマティ川 1995年8月

【参照】(1)[The Bagmati at Thapathali as recently as the 1970s was still flowing along a broad , sandy floodplain.](#)

(2)[ゴミのネパール](#)

(3)[1965年のバグマティ川はきれいだった。](#)(भीष्म)Bhisma@Bhismak1962

(4)渴水バイスターラ <https://www.himalkhabar.com/news/133500>

谷川昌幸

Written by Tanigawa 編集

2022/09/01 at 16:06

カテゴリー: [ネパール](#), [社会](#), [経済](#), [文化](#)

Tagged with [ゴミ](#), [都市化](#), [公害](#), [水](#), [水場](#)